事例番号 118　ワークショップから始まるまちの再生（広島県庄原市）

1. 背景

庄原市は広島県の北東部に位置する人口 4 万 4 千人弱のまちである。2005 年 3 月、旧庄原市と周辺の 6 町が合併し誕生した。東は岡山県新見市、西は三次市、南は府中市及び神石高原町、北は島根県、鳥取県に接している。

庄原市はかつては三次市と並んで備北地域の商いの中心となっていた地であり、市役所や商店街を中心とする地区は古くから比和、西城、東城等の広域商圏の拠点であった。その昔日の面影は「路地と通り」に残されており、道路幅は狭く、店舗、住宅等は密集している。

道路の狭さや駐車場がないことはマイカーが普及するまでは商業の障害にはならなかったが、モータリゼーションの進展で大型商業施設が郊外に進出するようになると、中心市街地からは客足が遠のき廃業する店も出るようになってきた。庄原市及び周辺地域の過疎化が進んで中心市街地の定住人口が 1960（昭和 35）年をピークに大幅に減少してきたことも沈滞化に拍車をかけてきた。

庄原市の 2000（平成 12）年国勢調査人口は 45,678 人であったが、それは 1995（平成 7）年の 48,539 人より 2,861 人も少ないものであった。2005（平成 17）年 11 月末の住民基本台帳人口でも 43,856 人と減少傾向は続いている（なお、合併して新庄原市となっているが、ここでは旧庄原市の数値を比較している。本稿では基本的に旧庄原市の取り組みをとり上げているので、以下断らない限り、「庄原市」は「旧庄原市」を指す）。

庄原市の位置

このような中で、庄原市に近年ある変化が起きている。10 年ほど前の 1994 年には 14 万人程度であった庄原市の観光入込客数が、2003 年には 100 万人に達したのである。その要因は、ひとつは中国地方唯一の国営公園である国営備北丘陵公園（年間の入園者数 40 万人以上）が開園したことであり、もうひとつは温泉施設「かんぽの郷庄原」がオープンしたことであり、さらにもうひとつは

地域産品の販売所やレストランがある「食彩館ゆめさくら」が開業したことである。これら三つの大型観光集客施設が中国自動車道庄原インターチェンジ付近にできたことで来訪者が増加していると言える。

しかし、観光客が 10 年で 7 倍程度に増加しても、大半は庄原インターチェンジ周辺の施設を訪れるだけで、中心市街地の賑わいには余り貢献していなかった。そうした状況下、一般市民の提案で、何気なく通り過ぎている街の中の“おもしろスポット”を探そうという資源発掘型の活動が始まり、市民の有志による「まちかどネットワーク・庄原わくわく隊」が結成された。そして、庄原市の中心市街地では、昔“塩の市”が開かれたいたことが分かり、2001 年 3 月からは月に一度、商店街の空き店舗を活用して、昔の市を「九日市（くんちいち）」として現代に復活させた。

このまちづくり活動の芽生えを受けて、庄原市でも中心市街地の賑わいづくりのために積極的に市民の活動に支援を行うことを決め、2003 年 6 月、市民のやりたいことを少しずつ実施することを目的に「みんなのやりたいことワークショップ」を募集し、多くの市民に参加を呼びかけて、多くのまちづくりグループを立ち上げた。そして、まちづくりの拠点施設として、商店街の中にある空き店舗を活用して「市民交流サロンラッキー」を開設し、市民主体のさまざまなグループが話合い情報交換する場所をつくった。

これらの活動は、1989 年に庄原市に開学した広島県立大学（2005 年 4 月に県立広島大学として統合）の学生が参加したこともあり、まちづくりに参加する市民の年齢層の幅の広がりや若者の新しい価値観や積極的な動きを取り込むことにつながっている。

庄原市のまち並み

2. 目標

庄原市の「中心市街地活性化基本計画」は、中心市街地の将来目標像として「人にやさしい、にぎわいのあるまち庄原～「住」「商」「遊」が一体になった中国山地の交流拠点都市～」を掲げている。その背景には次のような課題意識がある。

現在の古いままのまちは、「路地と通り」等の魅力的資源を持っているが道路が狭く安心して歩けない等の問題がある。一方、近年、中国自動車道庄原インターチェンジの周辺に観光資源が整備され、観光客が大幅に増加したが、その来訪者を如何に中心市街地に誘客し、回遊させるかが課題である。そこで、国営備北丘陵公園などの観光客をまちの中に引込み活性化につなげるために、体の不自由な人・高齢者等が安心して歩けるように都市基盤の整備を行う。ただし、路地などの庄原らしい情緒、風景等を活用することに配慮する。また、市役所・既存商店街を中心とするエリアに、住民の生活利便性を確保するための最寄品を中心とした近隣型商業の振興を図る。さらに、庄原商圏は庄原市及び近隣市町村を含めた広域的な都市機能の核となる、広域型商業集積を整備する。

3. 取り組みの体制

(1) ワークショップの活動

2003(平成 15)年 6 月、行政の呼びかけで「みんなのやりたいことワークショップ」が募集された。当初は 5 つのワークショップがスタートし、約 100 人が参加した(広報 2003 年 8 月号)。

① 「観光ワークショップ」
観光資源の発見やそれらを利用した楽しみづくりなどを進める

② 「市民交流サロンワークショップ」
市民活動の場としてのサロンの利用方法、運営ルールなどを検討

③ 「シアターワークショップ」
気軽に映画を見ることができ、映画を通した交流ができる空間の創造に取り組む

④ 「ギャラリーワークショップ」
街中にコンサートや演劇、展示などの文化活動、世代間交流ができる場などをつくる

⑤ 「新たな提案ワークショップ」
4 つのテーマ以外のやりたいことに取り組む

その後「ギャラリーワークショップ」と「シアターワークショップ」が合体して「楽笑座ワークショップ」になり、また、「新たな提案ワークショップ」から「食廃油リサイクルを考えるエコ燃ワークショップ」と「パソコンの利活用を行なうパソッパワークショップ」が立ち上がり、6 つのワークショップになった(広報 2003 年 10 月号)。また、九日市実行委員会が「にぎわいづくりワークショップ」として参加した。また、「楽笑座」、「観光」、「にぎわい」の 3 つのワークショップには県立大学の学生も参加している。「エコ燃ワークショップ」は、食廃油を原料にしてバイオ・ディーゼル燃料(BDF)拡大を図る特定非営利活動法人「資源をむだにしない生活を考える庄原市民の会」として設立認証の申請中である。

（2） 産学官の連携組織「しょうばら産学官連携推進機構」

広島県立大学と庄原商工会議所、庄原市の 3 者により 2003 年 4 月、「しょうばら産学官連携推進機構」が設立され、「広島県立大学」の知的資源やシンクタンク機能を地域産業おこしなど地域振興に生かす取組みがスタートした。専任のコーディネーターを配置し、大学の研究シーズや人材を地域の企業・事業者・市民のニーズと結びつけるマッチング活動を核に、月例セミナーやシンポジウムを実施し、その結果、企業と大学の共同研究、委託研究が数多く進められるところとなり、すでに商品開発という形での成果も芽生えている。事務局は交流サロン内に置かれている。

4. 具体策

（1） 市民交流サロン「ラッキー」の設置（2003 年 11 月開設）

証券会社の空き店舗を 2003 年 4 月から市が賃借し、「しょうばら国際交流協会」（JAICA の青年招聘事業なども実施、1 名常駐）、「産学官連携推進機構」が入り、市民交流サロン・コーディネーターを常駐させた（更に 2005 年 4 月からは 2 階部分を庄原市商工観光課の事務所として利用している）。

「ラッキー」は、ワークショップ活動の拠点として 2003 年 11 月から市民に開放されている。空き店舗を活用して開設した「市民交流サロン」を拠点に、市民主体のさまざまなワークショップが誕生した。その活動の中から市内の観光スポットや飲食店などを紹介するマップの作成や、市街地にある酒蔵を活用し映画やコンサート、演劇などが楽しめる「楽笑座」と名付けられたスポットの整備などいくつもの企画が実現している。広島県立大学の学生たちも、まちづくりへの参画という形で地域に大きく貢献していた。市は、空洞化する商店街へにぎわいを取り戻そうと、市民や学生たちに「みんなのやりたいことワークショップ」への参加を呼びかけた。

「交流サロン　ラッキー」

(2) 様々なワークショップの活動

6 つのワークショップを立ち上げ、中心街に活気を取り戻そうと奮闘している。そのうちの一つ、「楽笑座ワークショップ」は、地域の使われていなかった酒蔵を譲り受け、まちなかに「にぎわい」と「楽しみ」を創出する場として改修することを提案した。それを受けて、市では、みんなが気軽に集え、音楽や演劇、映画、各種イベントができる楽笑座を 2005 年 3 月 19 日にオープンさせた。飲食部門は公募し、普段は飲食店として、町おこしの新たな拠点として期待されている。

そのほか、毎月 9 日に市(九日市)を開いている「にぎわいワークショップ」のほか、県立大学生を中心とする「観光ワークショップ」は「さくらプランニング」という名称で 2004(平成 16)年から紅梅通りで七夕まつりを開催し、約 2,000 人を集めた(広報 2004 年 8 月)。またイラストによる「庄原はっけんマップ」作成した。行政が作る網羅的パンフレットとは違い、学生自身が選んだお店なども掲載された。

九日市 (資料:庄原市)

(3) 楽笑座整備事業

① 「楽笑座ワークショップ」

「ギャラリーワークショップ」と「シアターワークショップ」が合体して「楽笑座ワークショップ」となり、まち中にコンサートや演劇、展示などの文化活動や世代間の交流、気軽に映画を楽しめる場をつくろうと活動を開始した。毎月 9 日に市(いち)が出る九日市との連携やまちなかで市民が気軽に発表できる空間が欲しいとの提案があり、まち中を散策する中で、昔の造り酒屋の「蔵」が候補として上がり、相談したところ了解が得られた。その後、どのような施設にするか、運営方法の検討、類似

施設の視察、酒蔵の片付け、食の経営者の選考、オープンイベントの企画等を行い、2005 年 3 月 19 日のオープンに至った。

現在、ワークショップのメンバーは学生を含めて約 20 人であり、月に一回程度のワークショップ活動を行い、イベントの企画・実施を行っている。また、ワークショップのメンバーを中心に、楽笑座を拠点として活動を行なう市民団体「楽笑座友の会」には約 50 人の会員がいる。

② 整備事業の内容

補助事業名　中心市街地商業等活性化総合支援事業費補助事業（経済産業局）
総事業費　44,517 千円（補助対象 35,524 千円、補助金 17,762 千円、補助率 1／2）
事業内容　整備工事事業、活性化事業
土地、建物　敷地面積（1,003 ㎡）　民間地借上げ
建物（273 ㎡）　市財産、補助金を活用して整備

③ 施設の概要

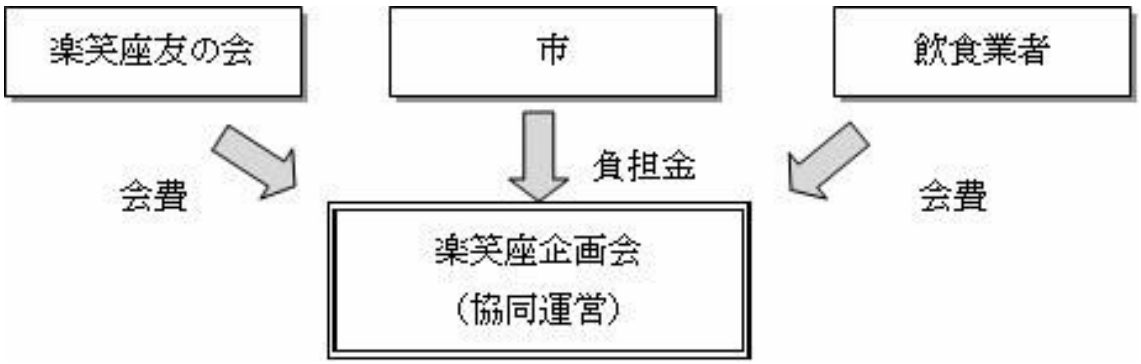
休憩所　音楽、演劇、芸能活動、講演会、飲食を楽しめるスペース
多目的スペース　映画、BS 放送、展示、会議、ビデオ作品の発表として活用できるスペース

④ 食の経営者

休憩所を使用し、飲食施設の経営、管理等を安定的、継続的に行うノウハウを有するものを公募した。「楽笑座ワークショップ」のメンバーが選考委員となり、プレゼンテーション（企画書の説明と提案）の評価を行い決定した。

⑤ 楽笑座の管理・運営

「楽笑座企画会」で運営・管理を行う。「楽笑座友の会」は、楽笑座を拠点として、にぎわいづくりを目指して、イベント、音楽、演劇など「楽しみ」を創出する活動を行う市民団体で、各種イベントを実施している。



楽笑座

楽笑座内部 **1**

楽笑座内部 **2**

楽笑座内部 **3**

楽笑座内部 4

まちなかワークショップの活動

5. 特徴的手法

ワークショップの活動を通して活発な市民参画、市民活動を展開している。また、市民の中に広島県立大学の学生も加わり、積極的にまちづくりに参画している。行政は、「市民交流サロン」を設置するなど「きっかけづくり」を行い、その後は市民の主体的な活動を側面的に支援協力している。

市の定住人口は減少傾向にあるが、庄原市は、まちの活性化を観光交流人口の増加に視点を置き、交流人口の増加策を実施している。その結果、目標であった「観光交流人口 100 万人」を突破した。

6. 課題

日帰り観光から体験滞在型観光への転換を進め、リピーターの拡大、宿泊施設の強化、観光資源の掘り起こしを図る必要がある（例えば里山を生かした体験講座など）。

また、従来型のワークショップは地理的に旧庄原市の人しか参加できないため、合併した他の地域の人の参加、合意形成をどのようにするかが課題である。2006 年 9 月には合併した地域も参加できるウェブ上のワークショップを立ち上げる予定にしている。そのためには、情報公開を進め、参加意識の高揚を図る必要がある。

ワークショップは、手軽に始めることができ、必要に応じて新しい組織への移行、また役割を終えればその活動に区切りがつけやすいなど柔軟な組織体である。今後も、新規ワークショップの立ち上げを支援し推進することが必要である。

（参考・引用文献）

庄原市関連ホームページ
庄原市中心市街地活性化基本計画